



1984-5

No.188

【表紙】

日本玩具博物館  
(兵庫県香寺町)

解説は19ページ  
題字デザイン・桑山弥三郎  
カット・林美紀子

# もくじ

美術資料の情報システム  
水野敬三郎 4

美術資料の整備と活用  
—東京国立博物館資料館の場合—  
原田 実 7

我が県の文化行政  
「こころの行政」をめざして  
—兵庫県の文化行政— 中井 之夫 10

### 文化庁ニュース

昭和59年春の褒章受章者決まる	13
昭和59年春の勲章受章者決まる	13
日本芸術院賞受賞者決まる	14
昭和59年度こども芸術劇場実施計画	16
昭和59年度青少年芸術劇場実施計画	17
昭和59年度中学校芸術鑑賞教室実施計画	18
文化庁優秀映画並びにこども向けテレビ用 優秀映画製作奨励金交付作品決まる	20
著作権の集中的処理に関する 調査研究報告書について	21

能楽(三役)研修生(第一期生)募集要項	15
昭和58年度文化庁日誌	22
昭和58年度文化庁月報総目次	25

### 展覧会

ティッセン・コレクション名作展	
近代絵画の展開 —マネから今日まで—	30
ニュルンベルク、ドイツ民族博物館の所蔵作品より	
ドイツ美術展 —中世から近世へ—	30

国宝鑑賞シリーズ⑫ 28 国立劇場ニュース 31

# 美術資料の情報システム



水野敬三郎  
(東京芸術大学教授)

この二月、東京国立博物館に資料館が開館した。我々美術史の研究にたずさわるものが久しく待ち望んだところである。美術史学会としては、かねて美術史研究資料センターの設置を文化庁長官に強く要望していたのであるが、いよいよそれが実現したわけで、まことに喜ばしく、また今後の充実に期待するところが大きい。

およそ美術史の研究においては、まず実際の作品に接することが、最初の出发点になることはいうまでもない。生の作品から直接うける美的感動が史的研究所の発条となり、その感動とはいかなる性格のものか、その感動をひきおこしたものが何かを分析することから研究がはじまる。しかしその研究の過程においてたちまち必要となってくるのが、まず写真資料である。作品の記憶を確かめるために、また他の作品との比較のために、経済的な問題を含めていえば、いまもつとも有効な手段としては写真をおいてないといえよう。ところがこの写真を個人を集

の文化財調査報告の類については、一般の大学の研究室では、ほとんど見られない、あるいはその刊行を知らないことも多いのが現状であろう。その中には極めて貴重な情報が含まれていることが往々にしてある。これらが一堂に会して閲覧が可能であれば、美術史の研究に益するところが甚だ大きい。

写真資料、文献資料、いずれもこれまで美術史研究者が散々苦労してきたところである。その困難を乗り越える血のじむような努力の末に、おのずから道は開けてきたという面もある。それができなければ研究者として一人前でないという面も確かにある。しかしその不便さから解放され、各人のエネルギーがそのような研究の前段階でなく、研究そのものに集中できるとすれば、これに越したことはない。それに、ただか三十年たらず前の私の学生時代とくらべても、情報量は大幅に増大している。昭和二十四年に約二百名の会員数で発足したという美術史学会も、いまや千三百名に近い会員を擁している。美術史の底辺は増大し、それだけに情報を提供する側も、情報を要求する側も拡大したのである。

このたび開館した東京国立博物館資料館は、研究者や教育・学術・文化等に関する事業のため、資料の利用を必要とする者を対象として、図書資料・写真資料・歴史資料の閲覧、写真作成等の要望に応じ、情報についての質問、相談にも応ずるシステムとなっている。いまカード

めるのには限界がある。私も学生時代から三十年近くはわたり、専攻する仏像の分野で、折にふれて随分写真を撮影もし、また焼き付けを購入するなどしてきたが、それでも集めた写真は枚数にしてたかが知れたものである。写真やネガは大学の研究室に置いて学生が利用できるようにしているが、さまざまの問題をもつ学生の要望にこたえられない場合が多い。大体、作品の撮影にあたっては、よほど条件が整わないと、参考にあたえる資料写真はできにくく、またその条件が整いにくいのである。他方、多くの研究者が、自分の研究に必要な写真を自分で撮影するのは、被写体となる文化財の保存の上から極めて不都合であるというまでもなからう。

近年、美術書の刊行が相つぎ、図版も豊富に提供されているが、かつてのコロタイプ印刷とちがって、細部を拡大鏡で見れば、ただ点が浮き上がるという印刷法によるものが多く、厳密な意味で写真の代用となりうるものは少ない。

による写真資料の所蔵者別索引や分野別索引、写真原板の分野別索引、図書についても書名・著者名索引のほか、図版別文献索引も用意されている。やがてはコンピューターによる情報処理も行われる予定という。

東京国立博物館ではすでに多年にわたり、日本・東洋美術の諸分野に関する図書および写真資料が蓄積されてきた。従来からもそれら資料の利用は館外でも許されていたが、常時これを閲覧し、その場で写真資料を比較検討できる場所もシステムも用意されていなかった。今回資料館においてその場が提供されたことは、美術史研究者やその他の利用者にとってはまさに画期的なことといわなければならない。それだけに今後期待するところも多く、以下それを幾つか記しておきたい。

美術関係の情報資料を集め、提供する機関は、すでに東京国立文化財研究所、京都・奈良の国立博物館に発足している。このうち東京国立文化財研究所は、早く昭和三年に美術研究所として設立され、写真やその複製、図書などの収集の蓄積があり、昭和五十二年からは情報資料部が設置されて独自の活動を行っている。従来からもその分類整理された写真・複製は研究に極めて有効であったし、そこで編纂される『日本美術年鑑』には、毎年の美術関係文献が網羅的に収録され、研究者を益するところ大であった。奈良国立博物館には昭和五十五年に仏教美術資料研究センターが、京都国立博物館には同五十

このような事情であるから、写真資料を一か所に集積してそれを公開し、またその焼き付けの要望にこたえる公的機関の存在は、美術史研究者のひとしく切望するところであった。ことに若い研究者にとっては切実な問題である。これは同時に文化財行政の面からも解決を迫られている問題であるといえよう。

研究者にとつての第二の問題は文献資料である。昭和三十年代はじめの学生時代、私の学んだ研究室では、専攻する分野に関係する古記録類としては、『群書類従』くらいしか揃っていない。『史料大成』などでも探して読むのに苦労した覚えがあるが、いまは古記録類の複製や新たな公刊が相ついで、私の身のまわりではそれらを読むのに苦労する話はあまり聞かない。とはいえ、それもある程度恵まれた研究環境にいればこそその話であろう。恵まれぬ環境にいる研究者も多いはずである。美術関係の図書や図録類も近年多く刊行されているが、予算や収納スペースの関係で、すべてを揃えるのは容易でない。ことに目にふれにくいのは大学の紀要や、各県・市町村等で発行される、文化財の調査報告のたぐいである。大学の紀要の場合は、甲羅をへた研究者ならば知己もふえて、抜き刷りなどを送ってもらえ、学生もその恩恵をうけることができるが、そうでない場合には、そこに収載されている重要な論文の存在に気がつかないことが多い。これは、『史学雑誌』の毎年五月号にのる「回顧と展望」を見ていても、しばしば気づかれるケースである。各県や市町村発行

六年に京都文化資料研究センターが設置されている。これらはその名の示すとおり、それぞれの館の地理的・歴史的位置にふさわしい美術資料のセンターとして性格づけられているもので、後者の場合は、同館に併設された文化財保存修理所との関連で、保存修理に関する資料収集や調査研究も行われている。

これら各機関における今後の資料の集積にあたって、まず望まれることは、それぞれの分業的活動が効果的に行われることである。限られた予算と人員による情報処理をもつとも有効にするためには、各機関での収集資料の重複をできるだけ避け、それぞれの役割に応じた特色を可能なだけ追求すべきであろう。相互の連携はコンピューターによる情報処理によって実現されよう。

東京国立博物館の場合には、日本・東洋の古美術全般を対象とした資料の総合的な集大成が望まれるが、ことに各分野の基礎的な名品の資料がまず集められるべきであろう。東京国立博物館は、そこで開催される展覧会の性格の上からいっても、その点でもつとも恵まれた立場にあるといつてよい。

しかしそれと共に強く望まれるのは、東京国立博物館それ自身の所蔵品の写真資料や調査データの整備充実である。すでに図版目録の刊行などを通じて、所蔵品の写真資料はかなり整備してきたと思われるし、最近行われている館内外の研究者を集めての法隆寺宝物館列品調査も大きな成果を挙げているが、なお分野によって

は写真資料や調査データが十分に整わず、一般からもその整備に対する要望が強い。

自身の所属する東京芸術大学の芸術資料館においても、その蔵品の図版総目録の刊行は糸口についてはばかりで、その完成には十年以上の歳月がみこまれているが、この仕事の進展とともに写真資料も整備して行くわけで、その完成なくしては収蔵品の十分な活用はなしえない。膨大な量に上る作品を収蔵する東京国立博物館としては、模本なども含めた全作品の写真資料はまさに気の遠くなるような話であるが、他ではなく東京国立博物館の資料館でなければ手をつけられない仕事なのであるから、その実現に向かって一歩でも二歩でも前進していただきたいと思う。

次に望まれるのは、写真資料・文献資料のみならず、作品に関するデータの収集と公開である。美術史上の基準的な作品については、その基礎的なデータを研究者のすべてが共有することが理想である。私の専門分野でいえば、故丸尾彰三郎先生を中心に、毛利久・西川新次・井上正の諸先輩とともに、私もその驥尾にふして、まず平安時代の造像銘記を有する彫刻作品についての基礎的なデータを集成し、『日本彫刻史基礎資料集成』平安時代造像銘記篇八巻として刊行したが、これも目的とするところは、基礎的なデータの研究者による共有にあった。いまはさらに西川杏太郎・田辺三郎助両先輩の参加もえて、統篇の平安時代重要作品篇を刊行中であり、丸尾先生の遺志をついで鎌倉時代造像銘記篇の

及ぶことをめざしている。『奈良六大寺大観』、大和古寺大観』も、古代彫刻の中核をなす奈良の古寺の彫刻に関する基礎的なデータを提供することとして、古代彫刻史への大きな寄与があったし、奈良国立博物館により刊行を続けられている『仏教美術』、その他多くの基礎的な資料集が近年多く刊行されている。

このような図書としての公開はもちろん大いに必要であり、極めて有意義であるが、しかしながらそこには出版事情その他からくるさまざまな制約があることも否めない。精細なデータの完全な刊行はむしろ極めて困難であるといいた方がよい。またこのような図書の刊行に頼るから限度がある。調書や実測図、あるいは光学的な方法による調査データなどは、生のままに集積され、公開される方法がとられてもよいのではないだろうか。

このようなデータを作品の実査によってうることは誰にでも無制限に許されるわけではない。この場合にも文化財保存の立場から好ましいことではない。ただデータは一回とればよいというものでなく、研究の進展や問題意識の拡大にともなって、修正され、より充実されることが必要なことも銘記されるべきであろう。事実、平安時代造像銘記篇に記述されたデータについても、記述者自身の再調査その他によって、修正の必要を感じていることはしばしば出てきている。

資料の発見、データの紹介はもろもろの研究の

## 美術資料の整備と活用

—東京国立博物館資料館の場合—



原田 実  
(東京国立博物館資料館長)

今年の二月一日、東京国立博物館に資料館が開館し業務を開始した。業務開始といっても、なお準備中のももあってそのすべてではなく、部分操業というのが実際のところであるが、ともかく懸案の資料公開の仕事がレールに乗り、すでにかなりの利用者を迎えている。そこで、ここに改めて業務の概要を紹介し、併せて資料整備の現状や課題などについて紹介してみることとする。

資料館設立の趣旨は、東京国立博物館が保管する美術資料を、研究者、教育・文化・学術などの事業に携わる人たちの利用に供しようというものである。当博物館に、多数のすぐれた美術・工芸品や考古遺物が保管されていることは周知のところであるが、そのほかに、これまた膨大で貴重な諸種の学術資料の蓄積があることも一部のの人に知られていた。そうして近年、それらの資料の公開利用を望む声が高まっていたが、場所や人手などに制約があつて十分な対応ができていないままに過ぎ

てきた。昭和五十七年四月に資料部が設けられ、そしてこのたびの資料館の完成により、ここによりやく要望にこたえうる態勢が整ったわけである。

資料館に保管され利用に供される資料は、写真資料、図書資料、歴史資料の三つに大別できる。以下、順にその内容と整備状況を記していく。

写真資料の中心をなすのは、いうまでもなく博物館の収蔵品を撮影したものである。それに、当館に出品あるいは寄託された作品や特別展の際に集められた作品の写真などが加わり、その数は現在モノクロームのネガ・フィルム約十五万枚、カラーのポジ・フィルム一万五千枚余となつている。そしてこれらのフィルムから焼き付けをつくり、それを台紙に貼って名称・時代・作者など簡単な情報を記入したものをキャビネットに収め、引き出して自由に見ることができるよう閲覧室に配置してある。写真資料の検索は、それ自

裏づけがあつてはじめてなされるものであるが、その紹介自体が美術史研究の発展を意味するものでなく、あくまでも研究の発展の基礎をつくるものである。作品に関する基礎的なデータをすべての研究者が共有し、同じ土俵の上で研究し、討論することによって、真の意味での美術史研究の発展があるといつてよいであろう。

以上に述べたような調査データの集積と公開を資料センターに期待する以上、その利用者である研究者の側からのこれに対する協力が不可欠であることはいうまでもない。一部の公的機関にデータの提供を求めて、一般の研究者はただその利用をするというのでは、虫がよすぎる。このような協力体制をつくるには一般の研究者の側の意識の変革も必要と思うが、この方向に向かって情報システムが動き出すことは、美術史研究の発展を願うものにとつての夢である。

もとより、ここに望んだような情報システムが、一朝一夕にその機能を完全に果たすことはありえない。しかしそのシステムが確立されるならば、五十年後、百年後におけるその成果は想像するだけでも楽しいであろう。

最後につけ加えれば、日本・東洋の古美術に関しては、東京国立博物館の資料館をはじめとする各機関がその機能を十分に発揮すれば、カバーすることができようが、日本の近代・現代美術に関する情報資料センターが別に設立されることを期待したく、さらに西洋美術史に関するものも当然必要とされるわけで、今後その実現に向けての関係各位の御助力を期したい。

体をマイクロ撮影によってB6判に縮小コピーしたカードで行うようにした。マイクロ・コピーであるため、同様のものを複数つくるのが可能であり、現在は従来の慣行的なジャンル別と所蔵者別の二通りを用意してあるが、さらに絵画に関しては主題別、彫刻に関しては図像別、工芸に関しては用途別による索引の組成を検討中である。

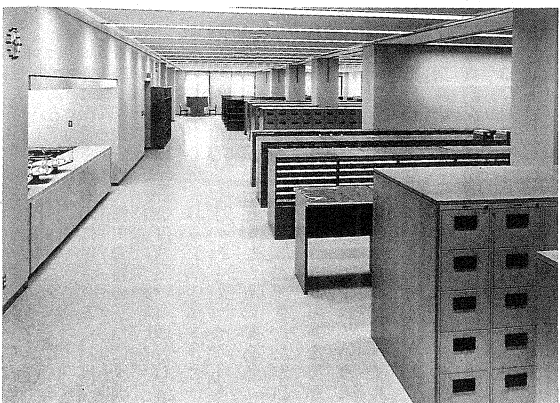
写真整備の方向としていま私どもが心がけていることに、資料の精密化がある。かつての撮影は、その時々必要に応じて行われることが多かったため、最小限のカットしか撮らないのが普通であった。一作品一カットという場合が少なくない。しかしそれでは利用範囲も極めて狭く、研究資料としての条件を満たしているとはいえない。そこで最近は一作品について必要にして十分なフィルムを費やすことにし、部分の写真なども可能な限り用意するようにしている。さらに大型カメラによる撮影や引き伸ばしをすすめており、

やがてこれにX線や赤外線などによるものが加われ、研究資料として高度な要求に耐えられる写真の集積ができていくはずである。なお当館には、旧原板と称している明治以来作製されてきた数万枚のガラス原板が保管されている。いうまでもなくそれ自体が歴史的な価値をもつ貴重な資料である。なにも多額の経費を要するので遅々とした進行ではあるが、フィルム化によるその再利用を図っている。

資料館に収納される図書・古典籍などの数は、おおよそ十五万冊におよぶ。そのうち、和書が七〇パーセント、漢籍が二三パーセント、残りが洋書という割合になるが、貴重なものが少なくない。また蔵書として特に注目されるのは、江戸城紅葉山文庫本や旧一橋徳川家本など充実したコレクションを擁していることだろう。さらに漢籍に含まれる朝鮮本、和漢にまたがる印譜がある。そうしてそのほか諸種の調査報告書、逐次刊行物、展覧目録等というのが蔵書構成である。

これらの図書は、閲覧室に開架で並んでいる参考図書を除いて書庫に収められ、所定の手続きにより出納台をとおして閲覧できることになっている。一部の貴重書については特別閲覧室が用意してある。検索は通常の索引カードによる書名別、著名別の二通りであるが、今年中に、それに分類別の索引カードが

たとえば現在用意されている索引カードでは、研究者によっては最初に必要になる材質による作品の検索やグループピングはほとんど不可能といわなければならない。あるいはそれは、この分野がきわめて個別的かつ超論理的な性格のものを対象とするところに由来するの



総合閲覧室

加わることになっている。また視覚をとおして必要な文献にゆきつけるように工夫した図版別文献検索カードをつくって索引室に配置してあるが、幸いに好評のようである。

図書収集の方針は、美術史に関するものを中心に歴史・文学関係書ということになるが、悩みはやはり購入費の乏しさである。しかし効率のよい収集を行い、着実に充実を心がけている。また、取書と並行してすすめている作

もれない。あるいはまた、学問の分化や複雑化にともない要求が急激に多様化しているのも事実だろう。しかし、いずれにせよ私どもは、そうしたさまざまな角度からの、さまざまなレベルの要求に対応できる方法を探し出さなければならない。精密で多角的な使用に耐える検索システムをつくることを宿題と受けとっている。

実をいえば、美術資料の整備にまつわるむずかしさを私共は予測しなかつたわけではない。昭和五十四年から三年間、他の博物館、研究所、大学などから参加をえて行った科学研究費補助金による「美術研究資料の情報処理及び活用に関する基礎的研究」は、美術に関する研究資料や情報を収集し、用語・表記の標準化、分類法や検索システムの開発など学術情報の処理について基礎的研究をすすめる。その成果によって資料の共同利用を促進し、内外の研究者の便を図ることをめざしたものであった。そうして、その成果は当然また、当博物館の資料整備に反映させるべきものと理解されていたのである。具体的な作業としては、美術作品の基本的研究情報を記録するデータ・シートの標準的な形式、分類表、作品の主題・題材に関する用語集、近世の障屏画をサンプルとした主題・題材に関する用語のシソーラスなどの試作をすすめた。

それらには、なお未熟な点や不備な箇所を

業に図書のマイクロ化がある。貴重図書をマイクロフィルムに、学術文献をマイクロフィッシュに収める仕事である。なにしろ対象が大量であり、やはり前途はりょう遠であるが利用の便と図書の保存の両面から有効なものである。ぜひ促進させたいと考えている。さらに新年度に着手する仕事に書誌情報の整備と目録の編集があり、遠からずその成果は公になるだろう。

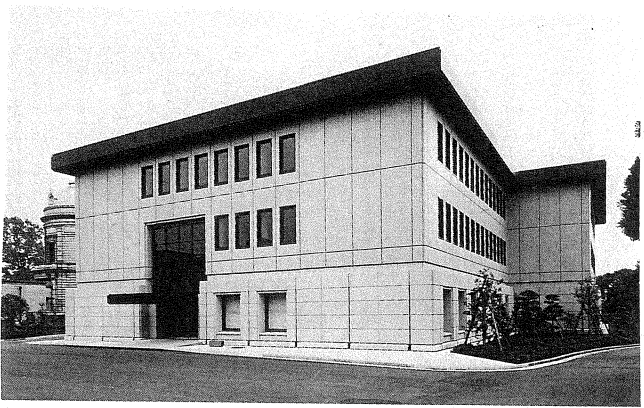
地図・絵図・拓本・模本などを内容とする歴史資料は、昭和十三年、本館の完成開館の前、旧歴史課から引き継がれたものが主体になっている。その数はおよそ三千件九千余点で、やはり多くの貴重資料を含んでいるにもかかわらずごく少数の研究者に知られていただけで、ほとんど活用されることがなかった。いまその整備に着手したところで、改めて調査し再分類し、利用の便を図ることになっている。そのほか、既に歴史資料といつてよい明治期の調査記録、明治以降の公文書類を保管しており、それらの閲覧利用も望まれているので、マイクロ化や索引カードの作製などの作業をすすめている。

さて、以上のように各種の学術資料を整備し、その活用を図るという仕事に携わって第一に痛感したことは、美術という分野では合理的で効率の高い検索システムをつくるのはたいへんむずかしいということであった。

残しているものが少なくないが、方法にさざりに論理的な検討を加え、コンピューターに結びつけば実用化が可能である見通しを得ているものもいくつかある。検索システムもそのひとつであり、なんらかのかたちで継続させなければならぬ研究である。

コンピューターによる情報検索やデータベースの構築は当館だけの問題でなく、将来形成されるべき美術に関する学術情報のネットワークを考えると、他機関、他施設との早からの共同研究が望ましい。なかなか大きな宿題といわねばならない。

もうひとつ、これもやはり当館だけでできることではないが、ぜひ、いま考えておかなければならないものに、学術調査によってえられた諸資料の整理と活用の問題がある。機関や個人が行う現地調査や実地調査の件数は年々増加の傾向にある。そうした調査の成果はリポートなどによって公にされるが、収集され作製された写真や実測図や調書などがやがて死蔵され、失われたりする例が多いのは、知られるとおりである。もし、それらの資料の内容や、所在を情報化して蓄えておき、必要とする研究者がいつでもその情報を知ることができるようになっておけば、便宜は計りしれず、また大きな無駄が排除されるだろう。そうしたシステムづくりに役立つことも、私どもの使命ではないかと思っている。



資料館全景

編集後記

○世は情報化時代。美術の世界でもこのような変化が着実に起こっています。そこで、今月号では水野、原田両先生にこの辺の現状と課題を紹介して頂きました。

○電話、テレビ、パソコン、ワープロなど、情報を処理し、伝達する機器の発達、普及はめざましいものがあります。問題は、これらの器に盛るべき中味。つまり、情報を収集し、食べやすいように料理することです。○このためには、地味な努力の積み重ねが必要だということが、両先生の論文から分かります。経済という器に盛る文化。美術館という器に入れる收藏品。これからは中味が大事になってきます。

(H)

「文化庁月報」五月号

(通巻第一八八号)  
昭和59年5月25日印刷・発行

編集 文化庁

発行所 株式会社きょうせい  
〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号

営業所 千代田区新宿区西五軒町52番地

電話 (0)三(二六八)二四一(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 発行政学会印刷所

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課

〒100東京都千代田区千代田二丁目二番二号

TEL (0)三(二六八)二四一(代表)

定価 一八〇円(送料四五円)  
年間購読料 二、一六〇円(送料共)